

---

# カセットテープの忘れ物

会津遊一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カセットテープの忘れ物

### 【Nコード】

N1468I

### 【作者名】

会津遊一

### 【あらすじ】

今日から俺は、アパートで一人暮らしを始める。もう、口うるさい親の顔を見なくて済むし、好き放題に何でも出来る。とりあえず荷物を解く。

そして掃除をしていると、押し入れにカセットテープが落ちているのを発見したのだ。前の人の忘れ物だろうか。気になった俺は、カセットを再生してみるが……。

「やったーっ！ 自由だああっ！」

俺は、叫んだ。

今日からアパートで一人暮らしが始まるのだ。

これが喜ばずにいられるものか。

もう親の顔を見なくて済むし。

気兼ねなくオナニーだって。

朝や夜だって、押し入れの中だってオナニーできる。

窓から外を見て、歩いている女を視姦する事さえもできる。

本当に実家から遠いという理由だけで大学を選び、引っ越しして良かった。

俺はこれからの日々を想像して、ニヤニヤと笑った。

例え、ここが築50年の木造アパート。

6畳一間。風呂キッチンは無しで、トイレは共同。

薄い壁は、隣の人が動いた音まで聞こえるし。

床を踏みつけると、濡れた木の感触がする。

そういう悪い環境だったとしても。

今日から、俺はこの城の主として生活できるのだ。

だが。

とりあえずは段ボールを開けて、荷物を整理しなくてはならない。

「メンドクセーけど、やるかあ」

俺は王様として最初の仕事に、ため息を漏らしていた。

「なんだこれ」

俺が襖の中を掃除していた時。

カセットテープを見つけた。

ラベルには、ヒミツ、と赤いボールペンで書かれていた。

ツメが折られているので、何か録音されているのだろう。

もしかしたら、前に住んでいた人の忘れ物かもしれない。

俺はニヤリと笑った。

中身が。

女の秘密だったらオナニーのネタになるし、男の秘密だったら笑いのタネになる。

早速、俺は偶々持っていたデッキにカセットを差し込んだ。

スイッチを押すと、きゆるきゆると擦れる音がして、やがて再生された。

ジージージーという不快なノイズに混じり、声が聞こえた。

『お前を殺してやる』

女の声だった。

『お前を殺してやる』

たぶん、これは年寄り。

それもデッキのスピーカーからでも伝わってくるぐらい、殺意に満ちた声だった。

『お前が夜に寝た後、忍び込んで殺してやる。包丁を首に突き立てて。いや、まず手足を釘で止めてやる。虫虻むしはらのように暴れるお前を殴り、皮を剥ぎ、指を折り、焼いてやる。そして殺してくれ哀願する、お』

そこで俺は再生を止めた。

聞いていて気持ち悪かったし、オナニーも出来そうにないし、面白くもない。

しかし、どうして、こんな内容でEミツというタイトルになるのだろうか。

訝<sup>いぶか</sup>しんだ俺はカセットを取り出し、もう一度見た。

特に変わった所はない。

普通だ。

だが、ぐるりと裏返した時。

俺の手が止まった。

カセットの磁気テープに、何か文字が書かれていたのである。

細かく、びっしり。

うしろをむけ。

と。

ゾツとした。

何かに引っ張られるように、俺が慌てて振り向くと。

息を飲んだ。

ぞわぞわと。

ぞわぞわと、うぶ毛が逆立っていく。

喉の奥から悲鳴らしきものが飛び出そうとするも、筋肉が硬直して喋られなかった。

老婆がいた。

音も立てず、いつの間にか背後に立っていたのだ。

乾いた雑巾のように、しわしわな顔。

死体に様に白い肌。

ボロ切れを身に纏い、手には錆びた包丁を握りしめている。

無機質な瞳が、俺を睨んでいた。

やがて、あのカセットテープに録音されていた声で言う。

「お前を殺してやる」と。

それを聞いて。

俺は。

恐怖で動けなくなっていた。

ガチガチと歯の根が震え、失禁しそうになっていた。

自分の意志で立って入られず、腰が砕けてしまう。

へなへなと床の上に、大股開きで座ってしまう。

このまま殺されてしまうんだ。

そう思うと、心臓だけがドクドクと激しく動き出す。

血脈に生暖かい血が流れ出し。

呼吸が餌を前にした野良犬のように荒くなる。

体中の筋肉がカツチコチになった。

すると。

白かった老婆の顔が、サツと朱に染まる。

皺だらけの顔が歪み、手にしていた包丁を握り直していた。

俺は、もう駄目だ、と思って目を瞑った。

だが。

いつまで経っても、俺が死ぬ事はなかった。

チラッと、薄めを開けてみると、そこに老婆の姿は無かった。

恐る恐る、部屋中を探してみたが、どこにも隠れてはいなかった。

「助かった……」

何だか分からないが、俺は安堵のため息を漏らした。

だが、また襲ってくるかもしれない。

あの老婆と顔を合わせるかも、と考えただけで、ブルルっと下半身が震えた。

俺は慌てて警察に電話した。

その間も。

どうして老婆は、俺の前から消えたのだろうか。

と、考え続けた。

やがて、数名の警察官が駆け付けてきてくれた。

俺は事情を説明しようと、矢継ぎ早やっぴに合あった事ことを話そうとした。

包丁を持った老婆が勝手に侵入していたのだと。

だが警官達は話を聞いてくれない。

それどころか、怒った様子で俺の事を睨んでくるのだ。

俺は混乱した。

一体、どういつつもりなのだ。

公僕の癖に、コイツ等は仕事をする気があるのだろうか。

俺は尋ねた。

「あの、お巡りさん達、俺の話聞いてますか？」

「……ああ」

だが、全員がチツと舌打ちしたのが聞こえた。

その態度にイラッとしたが、俺は言った。

「俺は殺される所だったんですよ。早く、老婆を捜してくださいよ」

「……それよりも君」

「はい」

「なんで、そんな姿なんだ？」

「姿？ 俺は、朝からずつとこの格好ですけど……」

「ずつと全裸なのか。しかも下半身をカッチコチにして」

「ええ。裸のまま掃除して、終わったらオナニーしようと思ってましたから。そんな事より、早く老婆を捕まえて下さいよ。下を見られたから、興奮が静まらなくて困っているんですよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1468i/>

---

カセットテープの忘れ物

2010年10月28日04時20分発行